

獣医学全国共用試験のめざすもの-獣医学共用試験調査委員会-

○高井伸二（北里大）、浅井史敏（麻布大）、新井敏郎（日獣大）、大野耕一（東大）、鎌田寛（日大）、北川均（岐阜大）、杉山誠（岐阜大）、山下和人（酪農大）

医学・歯学系大学では2006年度から、薬学系大学では2009年度から「共用試験」が始まりました。医学・歯学における共用試験とは、学生が臨床実習を始める前に備えるべき必要最小限の態度・基本的診療能力を客観的臨床能力試験（OSCE）で評価し、知識の総合的理解力をコンピューターを用いた客観試験（CBT）で評価するもので、モデル・コア・カリキュラムに準拠した全国共通の標準評価試験です。このような標準試験の実施の意義として、社会の求める優れた医師・歯科医師の養成に応えることが目的として謳われております。一方、6年制課程となった薬学教育でも実践能力を持つ薬剤師養成を目的に、新たなモデル・コア・カリキュラムの作成を通じて、実務実習を従来の見学型から参加型への転換を目指しています。この転換には、実務実習の行為の適法性の裏付けとなる条件（患者の同意、実務実習を行う目的の正当性、および薬学生の行為の相当性）を満たす必要があり、その一つの条件として薬学生が実務実習を行うに必要なかつ十分な基礎的知識や技能・態度が備えているかどうかを評価し保証するのが、共用試験であると位置付けています。

獣医学教育改革の一環として、現在、獣医学モデル・コア・カリキュラムの検討が始まりました。獣医学臨床実習等においても見学型から参加型実習への転換には教育の質保証が要件となるでしょう。しかし、参加型を支援する実習環境や教員組織をはじめとする教育基盤の脆弱性などが容易に指摘されます。質の高い獣医学士を輩出し、質の高い獣医療を提供するためには獣医学教育の原点に立ち返った教育改革が不可避であり、モデル・コア・カリキュラムと表裏一体をなす質保証の評価試験としての共用試験の賛否を関係者にご議論頂ければと思います。6年制導入から四半世紀を経て、正に今、獣医学教育の行く末が問われています。